

木末は花の得たりがは いざや歌へよ鶯よ』

昨日の雨は今朝はれて 庭はあやめに杜若

池はをどれる鯉のむれ いざや泳よわく子らよ』

錦衣よそほふ龍田ひめ われらを待るあの姫と

こさ紅の衣をさて いざや遊べよ小女らよ』

まどの光におどろきて 見れば嬉しき銀世界

雪をまろめて戦を いざや始めん同胞よ』

遊 漁

東 く め 子

芝の浦邊にしばくも ちろす手操と引く綱と

何れも今日は満潮の 舟にも余るうをのかず

子

佐々木信綱

海見ゆる窓の手すりに寄りそひて

幼なはらから白帆かぞふる

賤がやのせとに遊へるにはとりの

中にまじりて遊ぶ子らかな

花かけの芝生にねふるをさな子の

夢をまもりて舞ふこ蝶かな

川中におきならべたる石のうへを

飛びくこゆる里の子の群

うせし子が遊びし森の草のはな

またこの春も花さきにけり

よその子は學びさかりの年頃を

一人のわ子にしゝみ賣らする  
雪 田 土 雄

都より世つきのをの子歸り來て

手いれとゝのふ村をさの家  
佐藤朝恵子

子らは皆かへりゆきたる學ひやの

夕べの庭にさくらちるなり

松島をとひて 布 士 の 舍

松島のどろ水灣はさておきぬ

一眸千里松島の景

沖を見よ風ゆたかにして海ひろく

ささちる波に花のかをりあり

引き汐と晝とはみるかひなみの上の

月こそよけれまつしまの灣

竹柏園歌會十月兼題

霧

野も山もつゝみかれたる朝霧の上にそばだつふとの大嶽

伊藤梅子

増山三雪子

霧こめて千草の花はつゝめどもつゝみかれたる野邊の虫の音

末松生子

七艸の色もほのくゝみえそめて明けはなれゆく霧の中道

板倉止子

旅人の駒の鈴音聞ゆれど驛路はみえず霧にかくれて

板倉藤子

落稚なきそひて捨ふうなむらの聲をのこして霧たちわたる

安藤菊子

梓弓や口や何方おほつかな霧たちわたる玉川の里

萩野愛子

なにがしの鬚繪ににたりうす霧のみほりの松をつゝむあしたは

朝な夕なむかふ岡へのこすえまで沈みはてたる霧の海原

徳宮久子

おるがごさき人の往来も見えわかつ朝霧ふかしるんごんの市

佐藤朝恵子

あしの海はのくゝ見えてはこれ山八重たつ霧も今ばれんさす

大竹いせ子

友ごちば霧にかくれてみ山路をひさり旅ゆくこゝちこそすれ

松井さも子

立こむる朝霧の中に鳥なきてれむりし村は今明けんさす

松浦島子

かへり見ればわれをおくりこし我友の面おもみえず霧ふかうして

淺井鐵子

霧こめてやまぢは見みずさをしかのこえする方やたかれなるらん

中村文子

海山を一つにこめし朝霧もつゝみかれけり天つ日のかみ

坪野柳子

なく鳥の聲もほのかに棲名の海うな原暗くさりこめてけり

小林しげ子

わが先にゆく人やたれ霧の中にをりく聞ゆしほぶきの聲

池田愛子

荷おひ馬のすゞの音のみ高くして朝ぎりふかし山の下みち

鈴木光子

長谷川柳子